

研究展望

太宰春臺の学問方法
——荻生徂徠の「訳」論に鑑みて——

竹 村 英 二

「訓読」論は、単なる「技法」論の領域を超えた、「文化のあり方や私たちに内在する古典教養の質、そして近代の言語や文体の成り立ちにまで深く関わる、重要な課題」であるとし、近世東アジア文化圏の思想・文化の構成の問題ともつながるものとするのは中村春作である^[1]。熟慮すべき指摘であるが、これを十八世紀日本の思想世界に限定した場合、問題とすべきは、「訓読」のみではなく、荻生徂徠『譯文筌蹄』『学則』、太宰春臺『倭讀要領』に夙に語られる「翻訳」である。徂徠、春臺の両者は、訓読が、古代中国の書記テキストの和文脈への強いてなされた変容方法であり、原文の誤読、逸脱の多発の看過を必然として伴う故、むしろ忌避し、本来の言説への接近と適切な母語への置き換えのための翻訳技法を編み出す一方、逸脱、誤読との真摯な対峙の継続を旨とするブリコラージュとしての翻訳を主唱する^[2]。

吉川幸次郎は、日本で最初に訓読を否定し、原音、原イントネーション、原語序をもって漢文を読むべしと主張し、儒学／漢学研究に一大転換をもたらしたのは江戸中期の儒者荻生徂徠であったとする^[3]。これに対し田尻佑一郎は、徂徠が「崎陽の学＝直読＝優」／「和語＝訓読＝劣」との基本認識にもとづき、あくまで原文に近づくことを至上としていたとする吉川説を批判する。田尻は、徂徠が「和訓廻環之読」は華語の言語特性への無頓着、字義理解の不精確の原因であったと批判した一方で、徂徠は「唐人」の多元的言語生活での言語の意味を、「此の方」の相応する言葉で置き換える「訳」の作業の必要性を主張し^[4]、和語と華言の差異に注意し、華言の「言葉の硬軟、微妙な語感、余韻」などを「自分たちの母語で『訳』しえ」て「分かる」ことを重視したとする^[5]。徂徠は、「吾が分の内の事」として的確な「訳」の作成を重視したが、その方法を集約的に呈示したのが『譯文筌蹄』^[6]である。以下、田尻「〈訓読〉問題と古文辞学」を参照しながら、その「題言十則」の論旨をみる。

(1) それまで長らく日本における漢語／漢文理解の定法であり続けていた順逆廻環の読み方（即ち訓読）は、日本人が、本来「體質本より殊な」る（『譯筌』第二則、二丁裏）華語（外国語）をそれと意識せずに読む手段であると同時に、それゆえ読者をして彼我の言語特性の違いに起因する差異に対して無頓着にさせるのでこれを否定し、

(2) 逆に、順逆廻環の読みを基本的には否定するも、「文字ノ意ヲ、釣り取ルバカリニ用ル和訓」（『徂徠先生学則国字解』^[7]）、即ち字義理解のための一定の和訓、国音での読みの導入は肯定する。「最上乘」の法として「長崎中国語読み」⇒「俗語での解説」／「中国語での読誦」⇒「俚語をもっ

ての訳」との学習階梯を説く（『譯筌』第五則，七丁表～裏）が，語意理解のための「此の方の讀法」（即ち和訓）も必要（同）とし，原音での直読と，母語に近づけての義・理の十全なる理解の促進双方の重要性を説く。さらに，

（3）和語における転声（すてがな），助声（てにをは），副墨（ふくばく／すてがな），華語における「也」「矣」「焉」といった助語辞への注意を喚起し，テキストの棒読みを批判，字詁，句意，章旨，編法，正義と旁義といった点への十分な配慮をいう。「形状字面」（半虚字〈形容詞〉），「作用字面」（虚字〈動詞〉），「聲辞字面」（助字〈助詞，副詞，介詞，指示詞など〉）など品詞への意識を高くもつての熟読などを提言し，語脈，文勢，転折などについて意識しながら，中国古語，とくに古文辞を熟読することを提唱する。

徂徠は，「華人」の「本来の面目」を識るためのこの読解プロセスは，究極的には「華人の識らざる所」の「本来の面目」の獲得にもつながると説く。これは，表意文字としての漢字を共有した，中心としての漢字／周辺としての仮名が重層した文化圏の問題としてのみならず，「原語＝中心＝優」／「周辺語＝辺境＝劣」といった単純な図式の再考を促す見解ともいえる。

徂徠の高弟の一人，太宰春臺は，この問題意識にもとづきながら，語音，語意の習得法，読法を格段に進化させ，文章構造の問題と語彙の問題を峻別，分析的な方法をもって学問の本質に迫る方法を構築する。徂徠の最晩年頃までには，護園学派内では既に唐音学習が常識化していたが，奇しくも徂徠，そして長崎唐通詞で唐音の講師でもあった岡嶋冠山の二人の没年（1728）に開版の春臺『倭讀要領』^[8]は，その真骨頂である。春臺はとくに，現代中国語（唐音での俗語）の字音源（漢音，呉音など）にも注意しながら，古の華音（雅音）の正確な把握に基づく漢語（古語）理解を促す。『倭讀要領』の中核の一である「倭音正誤 第七」では，平・上・去・入の四声，唇・舌・牙・齒・喉・舌齒・齒舌の七音，清濁，輕重，開合などの音韻システムに則つての漢字音の整理，構造化，それに鑑みての倭音の誤謬の是正が試みられ，さらに「倭讀正誤 第九」では，主要な朱子学徒の読法への無頓着と誤読の執拗な指摘・是正を通じ，正しい読法が具体例をもって説かれる^[9]。

書物の半分を占めるこれら「語音」「読み」の是正に関する既述を踏まえ，下巻の「学則」においては学習法が説かれる。そこでは，初学はまず『孝經』『論語』『毛詩』『尚書』の，訓点無し of 原書の，「唐音」での講読がいわれる。続いて古註三禮，『周易』，『春秋』三伝，『国語』の通読，これまた白文をもつての「本文の記憶」を重視しての唐音での通読，記憶が求められ，さらには「句読」即ち punctuation への注意が求められる。つまり，「訓読」に頼らない，句読に十分配慮しての従頭直下での漢語文辞の「丸覚え」，漢文自体への学習者の「同化」が，学習の初期段階の必須とされる。

「義理ヲ尋求メ，文法ヲ玩索シテ，仔細ニ看ル」作業が求められるのは，これら白文の通読過程を経た後，次段階の素材として挙げられる『史記』『漢書』熟読の過程においてである。続いて『資治通鑑』（『綱目』ではない）も含めた西漢以上の書物が推奨される。直読を通じての漢語文辞

への「同化」の極端なまでの関わりを主張する春臺だが、この段階、即ち義理の尋求に力点を置く段階においては、「華音ノ読」「倭音ノ読」の「二法偏廢スベカラズ」とし、「華音ニ通ジタル上ニテ、又倭讀ヲ習フベキ」（中、三十九）と、学習段階を踏むことを強調しながらも倭訓、国音をもって読むことの導入を説く。これは、直読だけだと「吾国ノ人ハ」「其文句ヲ記憶スルバカリニテ、其義ヲ解スルコトハタハ」ざるから（中、三十八～九）であるとする。これは、徂徠『譯筌』『題言十則』第六則にある、「從頭直下」もまた「浮屠の經を念ずが如き」「此の方の生來の語音に非ざれば」、「必ず思惟を煩わす」との言（八丁表）に通底する、訓・直双方の読法が、詳密な読解を目指すにおいて両方とも必要不可欠であるとする主張である。これはまた、徂徠の主唱するところは基本的には原文の直読のみであったとする吉川説とは異なる面を呈示する。

その一方で、漢文直読の、とくに学習初期段階におけるその不可欠性への意識は、徂徠と春臺で多少温度差があるように思われる。徂徠は『譯筌』にて、「悉く和訓廻環の讀みを去らんと欲」するも「世久しく相ひ承けて讀書の法と為る、終に廢すべからざる」とし、つまるところ「不即不離の妙を和訓廻環の讀みの外に得しむ」ことのみを最低限の目標とし（第二則、三丁裏）、既述のように第五則では「崎陽之学」を提唱するも「然れども崎陽之学、世に未だ甚しく流布せ」ざる状況下、直読、唐音での讀みを重視しつつも「第二等の法」として「此の方の讀法を以て」の四書五經の通読をいう（七丁表～裏、これは前掲吉川論文でも指摘済）。これに対し春臺は、『史記』『漢書』の熟読段階まではとにかく白文に学習者が「同化」することを必須の学習階梯として定める。無論、徂徠が『譯筌』執筆をはじめた二十五歳当時（1691）と、『倭讀要領』の刊行時（1728、春臺四十七歳）では、唐音学習の学派内での流布の度合に雲泥の差があるが、『倭讀要領』に占める漢字音の正誤についての記述の分量^[10]、その他の紙面にも顕著な春臺の語音、音韻へのこだわりを考慮すると、彼における華音への高い意識を前提とする直読の位置づけが看取されよう。もっともこの点は、徂徠の、「目の文字に熟する」ことの重視、（訳の真意は）「眼光紙背に透る者を須ち始めて得」るもの（第六則、八丁裏）との主張に象徴される、古聖賢の真意は「目と心」で得るもの、「口と耳」は重視せずとの見解も勘案しての考察が必要であろう^[11]。

春臺『倭讀要領』は、それに示される音韻の説明、訳読の深さは「當時として比肩するもののない水準」にあり^[12]、「言語の学としての精密」の飽くなき追究に基づく、「言語それ自体に潜む個々の事象、表れているそれらこれらをそのままに取り出し、個々にまた処理」し、「包括的な意味」を析出する^[13]学術的努力の到達点といえる。それはまた、「具体的な言語観察をもって」の「人のありかたへの接近」の方法であった徂徠『譯文筌蹄』の意図^[14]を継承、格段に発展させる性格のものともいえる。「漢文ノ條理、血脉ヲ識得」す（『倭讀要領』中巻、四十九）べく從頭直下で、そして華音で読み、読むに四声、七音、清濁、開合などを精微に稽え（同、巻上、十五～）、「助語辭マデニ目ヲ属ケ」（同、巻中、三十八、四十九）、「句法、字法」（同、巻中、四十九）、「篇法、章法」（同、巻中、四十）の倭・華での異同、変化を考え、「句読」にも意を注ぎ、「倭訓」で大略をおさえるのではなく、「文義ノ差誤」（同、巻中、四十）に意を用いて執拗に古書、古聖賢の

一言一句を識得せんとする知的努力である。

このような包括的、構造的言語分析はしかし、江戸後期～幕末において発展的に継承されることはなかった。護園の諸学のみならず、太田錦城、海保漁村、安井息軒、帆足万里、東條一堂など考証に秀でた諸学においても、書誌学的研究における飛躍的發展とは裏腹に、春臺の言語研究の体系的追究を継承する姿勢はあまりみられない。春臺の「弟子ノ吾物ズキノ通ナラデハ、気ニ入ラズ。ソレユヘ弟子ヲ箱ノ中ヘ入テ置度心ナリ」^[15]といった性癖、さらには徂徠学の春臺以外の継承者において、『風雅文才』を尊ぶ側面が往々にして自堕落な浮華放蕩に傾斜してい」った^[16]事実があり、これをもって徂徠学離れが進行したことなども主因であろうが、実に惜しまれることである。

翻つてはその読法・読解法の言語学的吟味、言語へのアプローチにおける方法的独創性・革新性の考察は、江戸中期における、その思想環境「場」に胚胎する／言語研究の遂行により醸成される思想的発展への我々の注意、その思想史的考察の対象としての重要性への注意も喚起する。即ち、春臺は、「經義は春臺を推し、詩文は南郭を推す」との江村北海『日本詩史』巻四^[17]の語に端的に示されるごとく、“詩文化傾向”をみせる徂徠以降の護園諸学とは一線を画していた。また、主著の一『經濟録』は「凡天下国家ヲ治ルヲ經濟ト云」ではじまり^[18]、その「拾遺」では特産の奨励策など具体的な経済政策も提言され、それがのちに『日本經濟大典』などにも収められている^[19]ことから、これに今日的經濟觀念の萌芽を認めようとする者もある。しかし、これらの文言のみを切り取って春臺の思想を論じるのは浅見ではないか。また、春臺が經義を重んじたのは間違いないが、『倭讀要領』にあらわれる学術的考究過程に呈出される彼の学問内容はこれにとどまらない。それは、古書、古聖賢の一言一句を識得するにむけた執拗な知的努力と不可分である篇・章・句・字の四法への通曉、助語辞に関する知識、発音に関する諸法を駆使しながらの熟読、作文を通じ、とくに後漢以降の乱れた文章を是正するを先とする。同書では「儒者ノ本業」は「異国本朝ノ古今ノ事蹟ヲ覽テ、其成敗ヲ考テ、今日ノ事務ヲ思惟」すること（下、四十一）と、儒者の職責とその責任範囲が明言され、文帝『典論』の「文章經国大業。不朽之盛事」との文言が引用され、国家經營の大本は「不朽」なる「文章」（古言）であり、「文章ヲ以テ本トスル」といわれる^[20]。「文章ヲ以テ本トス」るとは、それを基盤とする、或は古言の精確な識得作業自体に宿る誠意と精進を基盤とするものであり、それ故に、「言語の学」としての精密の追究を必須とし、すぐれて「方法的」なることが目指される。そしてこの知的営み自体が強烈な護道の精神の顕われであり、まさに世を経え民を済う営みそのものであると考えていたとすることができよう。

春臺の時代における漢語テキストの翻訳作業は、「客観的自己と主観化された他者」といった単純な図式^[21]に押し込め成立する営みではなく、また、「自己でも他者でもない、それを超えた本質を捉える作業」といった言い方^[22]とも、少しズレがあろう。ある意味でそれは、（訓読を通じて）主観化され（たように誤解され）た他者を、いま一度その異質性をみさだめながら客観視する作業であるともいえる。この作業が春臺に課せられた／彼が対峙せんとしたものであり、逸脱、誤読をしばしば生起させる〈文化の翻訳〉場面、そこにこそ現前する真の難題との直面／対峙、その継続を必然とする、それを不可避とする作業であるといえよう。

基本史料

荻生徂徠『譯文筌蹄 初編』六卷、首一卷。六冊。文政十一年（1828）。著者蔵。これは文政年間のものだが、文政八年開版の宝暦版の補修版とは異なり、吉川幸次郎、丸山眞男監修『荻生徂徠全集』（みすず書房、1973年）第二卷所収の『譯筌』の底本である正徳版と同一内容である。

荻生徂徠『譯文筌蹄 後編』三卷、三冊。竹里散人序。巻首に徂徠の「序」を付した「文理三昧」を冠す。天保十五年（弘化元、1844）。著者蔵。

太宰春臺『倭讀要領』半三冊。吉川幸次郎、小島憲之、戸川芳郎編『漢語文典叢書』第三卷（汲古書院、1979年）所収のもの（享保十三年〈1728〉版）を利用。

太宰春臺『紫芝園稿』序目一冊、前稿五卷五冊、後稿十五卷十五冊、附録一冊。小島康敬編集・解説『近世儒家文集集成』第六卷（ぺりかん社、1986年）所収のもの（宝暦二年〈1752〉版）を利用。

注

- 1 中村春作、市来津由彦、田尻佑一郎、前田勉（編著）『「訓読」論——東アジア漢文世界と日本語』（勉誠出版、2008年）、「まえがき」。
- 2 「『訓読』の思想史——〈文化の翻訳〉の課題として」（同上）。
- 3 吉川「徂徠学案」（『岩波日本思想大系』三六「荻生徂徠」〈岩波書店、1973年〉）。
- 4 同上。
- 5 田尻「〈訓読〉問題と古文辞学—荻生徂徠をめぐる—」（中村春作、市来津由彦他編、前掲『訓読論』）。
- 6 以下、とくに注記のない限り著者蔵の『譯文筌蹄 初編』を使用。
- 7 吉川幸次郎、丸山眞男監修『荻生徂徠全集』（みすず書房、1973年）第一巻、328頁。
- 8 以下、とくに注記のない限り吉川、小島、戸川編『漢語文典叢書』第三巻所収版を使用。
- 9 岡田袈裟男「太宰春台と言語の学——『倭讀要領』の記述をめぐる—」（『立正大学大学院紀要』十六〈立正大学大学院文学研究科、2000年〉）。尚、本論文は『倭讀要領』の分析手法の詳細な検討を試みるものであり、江戸中期の言語学的方法論の発展段階を知る上で重要な研究である。
また、同書の音韻学的水準に関しては、狩野充徳「太宰春臺『倭讀要領』の「撥音法」と『文選音決』の音注」（中國中世文學會編『中國中世文學研究』四十五、四十六号、2004年10月）が、清代音韻学との比較研究を通じてその高さを論じる。
- 10 岡田氏は、漢字音の正誤に関する既述が全体の25.3%にのぼると算出する（岡田、同上）。
- 11 田尻、前掲「〈訓読〉問題と古文辞学—荻生徂徠をめぐる—」。もっとも、徂徠『學則』の「魚ヲ獲ル筌ヲ舎テ、口耳ヲ用ヒズ、心ト目ヲ謀」るとの言にある「口」「耳」の否定は、「耳からの中国語読みを否定するのではなく、訓点をせず原文のままという意味である」とするのは杉本つとむである（杉本つとむ『江戸の言語学者たち』〈雄山閣、1987年〉「第III章 古文辞学派と言語の学習・研究」、163～64頁）。この点に関しては、さらなる議論が必要であろう。
- 12 戸川芳郎「解題」（吉川、小島、戸川編、前掲『漢語文典叢書』第三巻）、14頁。
- 13 岡田、前掲「太宰春台と言語の学」、47頁。
- 14 岡田氏は徂徠『譯筌』をこう位置づける。同上、52頁。
- 15 湯浅常山『文会雜記』巻二之下（国会図書館、他蔵）。
- 16 小島康敬「解説」（前掲『近世儒家文集集成』第六巻）、14頁。
- 17 『近世儒家史料』上・中（井田書店、1942～43年）、他収。
- 18 『岩波日本思想大系』三七「徂徠学派」（岩波書店、1973年）、他収。
- 19 『経済録』『経済録拾遺』は滝本誠一編『日本経済大典』第九巻（明治文献、1967年）にも収録されている。

- 20 春臺「学則」(『倭讀要領』卷下)所収。
- 21 いうまでもなくこの図式は、C. レヴィ＝ストロース(Levi-Strauss, Claude), とくに *La Pensée Sauvage*, Librairie Plon, Paris, 1962 (邦訳『野生の思考』(大橋保夫訳, みすず書房, 1967年))を念頭とする。筆者は無論, レヴィ＝ストロースの自己／他者観がこのような単純化されたものとは考えない。しかし, この対概念がしばしば一人歩きし, 氏の思惟がこの単純な図式の中で理解され得る危険性は指摘したい。
- 22 「異質性を見さだめ」ることが翻訳作業の「奥義」であるとの, ベンヤミン翻訳者河村二郎の指摘は正鵠を射たものといえよう。ただ, 筆者は, 翻訳作業が「自己でもない他者でもない, その双方を超えた場にある普遍的な本質を捉えること」とする点, とくに双方を「超えた」「本質」の把握とする点に若干の違和感を覚える。